

歴史物語をデータベースで読む

中村康夫 総合研究大学院大学教授日本文学研究専攻/国文学研究資料館教授



『古今和歌集』52番歌の底本画像(ブラウザ部分)

フルテキストデータベース

ノートパソコンのハードディスクの容量が数十ギガになって、データの規模の大きさはあまり気にせずにデータベースが作れるようになった。テキストならいまでもなく、画像も適宜リンクを張る程度なら、とくに問題は起こらないのが今日のノートパソコンの現状である。

だれでも持てるパソコンで、必要な文献をデータベースとして検索できる電子図書館ができれば、研究はどれほど進むだろうか。ハードディスクの空き容量をどんどん図書館の書庫にでき、拡張自在な図書館が手持ちの鞆に入っている。こういうことを夢見て、国文学研究資料館では古典コレクション散文検索システムと和歌検索システムをつくった。

国文学の研究で最も重要な情報は作品の本文である。そこには定型はなく、表形式に構造化することは無理がありすぎる。そこで、まずデータをユニークに記述するために、発想の基本を文字の位置情報に置き、何巻・何ページ・何行目という情報を本文記述基本構造のベースに敷いて1行ずつテキストを電子翻刻する。このとき、漢字には振り仮名もあり、異文注記や注釈情報もある。それらをすべて排除しないで構造化するために、本文はテキストデータとして4層に構造化し、さらに、底本の画像データをリンクする。

具体的には、古典コレクションシリーズのCD-ROMにあるreadmeを参照いただくのがよいと思われるが、この方式によって、本文は注釈情報と掛け合わせながら検索でき、漢字なども、入力や検索が困難なものは、画像がただちに開くことで、快適に利用できるレベルになった。

これらは、平成11年の夏には、『二十一代集』『源氏物語(絵入)』のデータベース(岩波書店刊)の検索システムとして利用されるようになった。

時を同じくして、インターネットの急速な普及もあり、ネット上にはダウンロードのできるフルテキストデータが次々に用意された。国文学研究資料館のHP上には、岩波書店の旧古典大系全100巻の本文データが、さまざまな用途を考えて利用されるようになっている。

旧古典大系全100巻のデータベースの構造は、基本的に版面を再現することを重視するという思想によってつくられており、レイアウトなど、精細に及ぶ。古典コレクションシリーズでは、ユーザが自

分の必要とする作品本文をデータベース化できなければならないので、必要最小限の構造を採用した。旧古典大系を古典コレクションのシステムに登録するためには、その簡略な形にコンバートする必要がある。その方法については国文学研究資料館HPの研究者・中村康夫のページ<http://www.nijl.ac.jp/~nakamura/index.html>をご覧ください。

これで、パーソナルな電子図書館を簡単に作るができる。では、この図書館を利用して、情報を切り出しながら歴史文学の一面を紹介する。

全盛期の道長

11世紀の初め、平安時代中期、藤原摂関家全盛の時代に、王朝文学は大きく花開いた。その最高峰が『源氏物語』であることに異論はないと思う。

場所は平安京。一条天皇の御代、時の左大臣道長は娘彰子を後宮に入れた(999)。時に彰子は12歳。一条天皇は20歳であった。

一条天皇の後宮にはすでに23歳の中宮定子がいたが、彰子入内の日(11月1日)には、出産を間近に控え里にあった。約1週間の後(同7日)、中宮定子は敦康親王を出産する。藤原氏の中関白家は一の皇子誕生に沸き返るはずであったが、中関白家にはかつての栄光の残照すらなかったのである。父道隆はすでに病死し(995)、その翌年、兄伊周、弟隆家は罪を犯して流罪に処せられた(996)。敦康親王誕生のとき、伊周、隆家はともに召還されて(997)身は都にあったが、世評も運氣もすべてこの中関白家から離れていたのである。

やがて彰子が皇子敦成親王(1008誕生)、敦良親王(1009誕生)を儲け、この皇子が後の後一条天皇、後朱雀天皇になる。彰子は上東門院として長寿にも恵まれ、仕えた女房たちの中には紫式部、赤染衛門、和泉式部らの才媛がいた。

道長の宿運というべきか、その地位と人望の拓けようは、野望に満ちた権勢家が狡猾に獲得したというのとは少し異なり、疫病の流行等による公卿達の次々の薨去など、さながら歴史はそのようにしか進みようがなかったかのごとくである。

道長自身、多くの息男、息女に恵まれ、次々の帝の後宮に娘を入れて、ついに一家三后を実現する。その満足の境地を詠んだ望月の歌「この世をばわが世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思へば」は有名であるが、実は、この歌は、勅撰集などの歌集に入らないほ

か、道長自身の日記『御堂関白記』にも記載がない。今、歌論書、歌学書のフルテキストデータベースで「この世をばわが世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思へば」の歌の一節を検索してみ、辛うじて藤原清輔の著した歌学書『袋草紙』に記載があることを知るのである。そして、その『袋草紙』の記事を読むと、時の中納言藤原実資が日記『小右記』に書きとめており、『袋草紙』の記事はその日記からの引用であることが分かる。結局、実資が書き留めなければ、この歌は残らなかったのである。

当時の日記は個人的な秘すべきことを書くという内容のものではなく、有職故実や故事来歴を広く知るためのものとして書写もされ、こういうふう引用もされたのである。『袋草紙』の著者藤原清輔は、秀歌には返歌はしないものだという考えを示す先例の1つとして、この『小右記』の記事を見つけたのである。

道長はこの歌を、三女成子（『袋草紙』には「成子」とあるが誤り）の立後の祝宴で披露しようとしたとき、多少の銜いを感じてか「誇タル歌ニナムアル」と言っている。「誇タル歌」とは、確かにこの歌を捉えるキーワードとしてぴったりである。

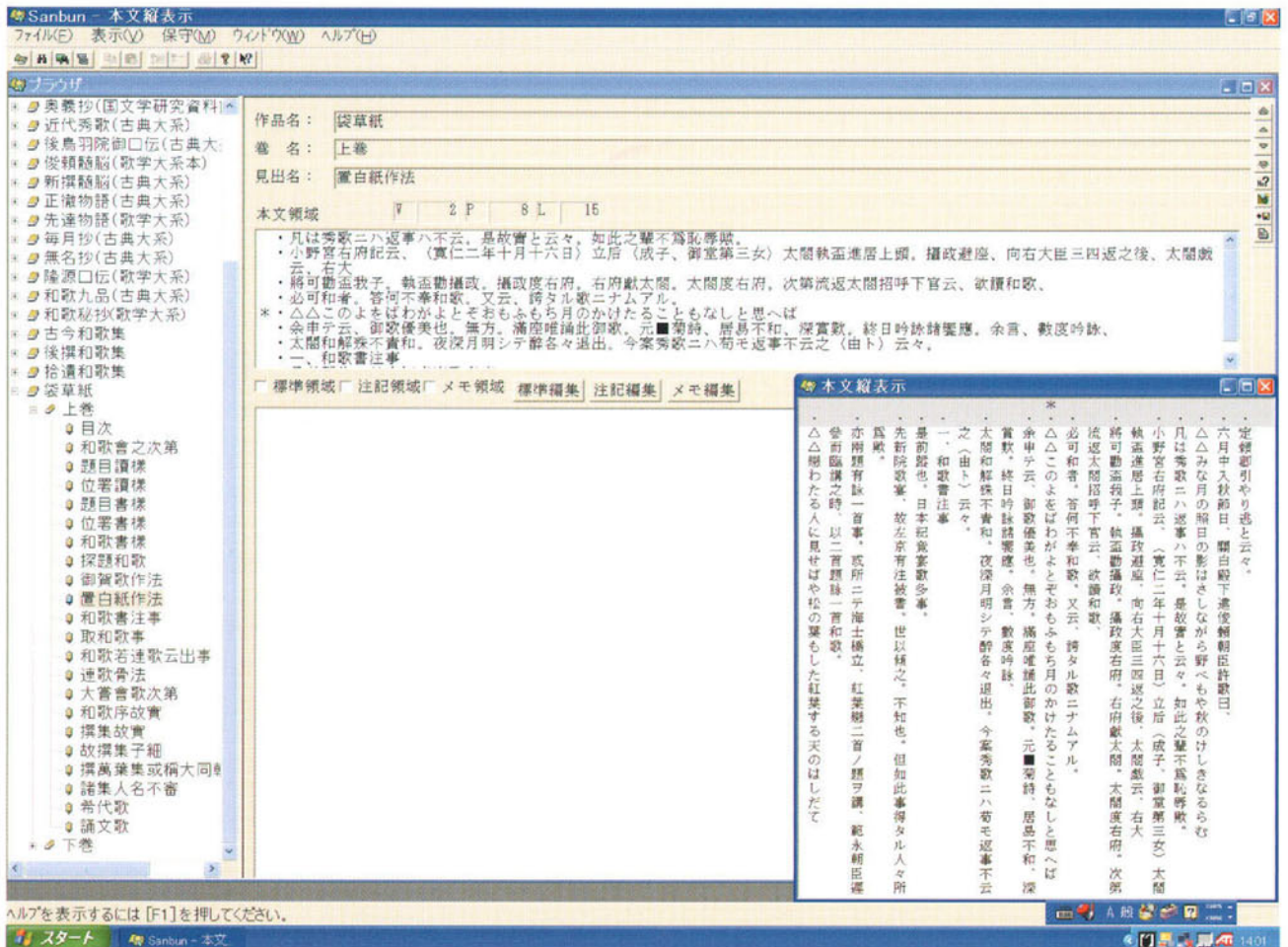
『古今和歌集』の良房の詠

道長の望月の歌は、確かに歌の風格とでもいおうか、一点の翳りもない今宵の満月さながらの充足しきった心中を、実に純朴な言葉に載せて成功している。そう味わってみると、『古今和歌集』に入る藤原良房の歌が連想される。

『古今和歌集』52番歌、藤原良房の詠「年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし」。藤原良房は道長からは5代前の祖に当たる。良房は愛娘明子（829生）を文徳天皇（827生）の後とし、自らの権勢拡充のための大きな礎を築いた。明子はやがて清和天皇（850生）を儲け、清和天皇代には、良房は摂政として政権を掌握する。

権力の地歩を固めていくどの段階にこの歌が詠まれたか。いろいろな可能性があるため、その時期は明らかではない。しかし、この歌では、花瓶に挿されたどこまでも美しい満開の桜の花の華やかさに、后として輝いている愛娘明子を見て取って、今の自分にはもう何も思い残すことはない、「花をし見れば物思ひもなし」と言い

道長の望月の歌が記載されている袋草紙の記事をブラウザで開けたところ。縦書き表示を右下に配した。左側が分類項目の表示、右側がデータの表示になっている。分類は作品名（袋草紙）、巻名（上巻）、見出し（置白紙作法）の3階層になっており、右中ほどの「本文領域」欄に本文中の位置がV2（第2册）、P8（8ページ）、L15（15行目）と示されている。△△（全角スペース）の次に、「この世をばわが世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思へば」が表示されている。





個人蔵『平治物語絵詞』三條殿焼討部（模本部分）。

上皇の仮御所三條殿に火が放たれ、焼り出された北面の武士が首を落とされる。信頼・義朝の軍勢はさらに勢いついて矢を射る。

放ってしまった。清和天皇はもう誕生していたのではないか。その充足を全部そのまま権力の達成に繋げてよいかどうかについては異論もありうるが、充足した権力者良房の気持ちに屈託はなく、5代後の道長にそのまま流れたかのごとくである。

「誇」をキーワードにして

「誇タル歌ニナムアル」と道長は言った。

言葉には、情報を把握し切り取る機能がある。「誇」は賞賛すべき事柄を切り出す機能もあるが、自惚れが過ぎた場合などは、人物の欠点をいうことにもなる。言葉そのものは多義的であり、多面的であるが、その言葉によって切り取る断面については、その言葉固有の様相を持つとよくだらう。

そして、また、歴史を切り取る言葉としては、連想される語彙を同時に検索し、分析して、総合的に判断することも必要と思われる。「誇」なら「誉」はどうか。「勇」なら「猛」はどうか。データベースによる検索は、それらを総合的に考察するに当たり、十分な情報を提供してくれる。

この与えられた紙面では、総合的な論の展開は無理なので、今しばらく、「誇」と藤原氏という側面から、記事の紹介を続ける。

道長の栄華を描いた『栄花物語』（赤染衛門編といわれる）の中で「誇」を検索してみると、道長に関わる記事としては、1箇所「誇りかなるけしきども」を記しているところがある。

寛弘四年（1007）、彰子も入内してすっかり落ち着き、20歳になっていた。次女妍子は15歳、三女威子は10歳。この3人が一家三后を実現する娘達である。

世の中の安定と繁栄を、豊かさの観点からも捉えようとする『栄花物語』は、初花の巻において、新年の京極殿邸内を描写する。そ

して次に、この道長家の将来性豊かな現況を実に明るく記し、さらに三条天皇の後宮に入ることになる妍子について、道長の目を通して書く。その妍子の華やかな姿を「色いろの御衣ども」「御髪の紅梅の織ものゝ御衣の裾にかゝらせ給へる」「御顔の薫めでたくけ高く、愛敬づきておはしますものから、花ばなと匂はせ給へり」と書く筆は、やや視覚に訴えるように絵画的な描写を強めている。そして、その豊かさの極致として、「御前には若き人びと七八人ばかり候ひて、心地よげに誇りかなるけしきどもなり」と描いているのである。

彰子はこの翌年に懐妊が明らかになり、道長家の上昇は次々止まることがない。

「誇」が文学作品キーワードとして重要な機能を持っているというほどではないのだが、現在まで伝えられる古典の諸作品の表現を、1つの言葉を手がかりにしてフルテキストのデータベースを辿ることで、ある程度まとまった世界が見えてくることは、よくあることなのである。

記録から歴史叙述へ

歴史物語とは、『栄花物語』を嚆矢とし、『大鏡』『今鏡』『水鏡』『増鏡』の四鏡と、以後の若干の作品のことをいい、歴史を物語風に仮名で書いている。編年で書くものも紀伝体を採用するものも、記述の軸は皇統譜にあり、各時代時代の歴史的展開をテーマとして、歴史時間を繋ぐように編述している。

『栄花物語』『大鏡』が描いた藤原氏全盛期では、道長世界の確立と展開が自ずからなるテーマとなったが、対象とする時代としては、必ずしも世の中の安定が続いたわけではなかった。

藤原氏が安定と繁栄を謳歌したのは京の都でのことである。10



世紀半ばには、都からは距離をおいた東国では平将門が新皇と自称し、関東の統治者として振舞った。また、同じ頃、瀬戸内海では藤原純友が海賊と結んで棟梁となり、勢力の拡張を図り、反乱を起こした。

このうち、将門の乱については『将門記』が著された。『将門記』の成立については諸説あり、幅があるが、百年余り後の11世紀中葉の前九年の役について編述した『陸奥話記』と並んで戦記文学の初めとされる。これらは、それぞれ信頼すべき記録を元に、漢文で編述された。編述者は多分都人で、文雅の素養に秀でた者であったであろうが、これらは地方が戦場であり、都に被害が及ばなかったところが、これから約百年後に起こる保元・平治の乱と違うところである。

都を描いた文雅の世界は歴史の裏側をも描写しているが、「誇」や「誉」などのキーワードをデータベースで検索してその結果を縦覧しても、しだいに武家の社会に流れをつくる中世の到来が見えてくる。中世は人間の悲哀を大きなテーマとするが、軍記物語の世界はさらに進んだ独自の境地を展開する。

保元・平治の乱の顛末を描いた『保元物語』『平治物語』はともに和漢混淆文で書かれ、琵琶法師によって語られた。少し後の『平家物語』についてはよく知られているところであるが、哀調を帯びた琵琶法師の語りは文学の音声化であり、文学の表現と享受は、内容が心の深いところで捉えられると多重感覚化（マルチメディア化）を進めるように思われる。

王朝の貴族文化が開花したころには、『竹取物語』『伊勢物語』『源氏物語』『紫式部日記』など、作品の享受として絵が描かれた。そして、武士が実権を掌握する鎌倉時代になるとは、合戦絵巻が描かれるようになった。

文学が多重感覚化するのには、そこに著される一人一人の生き死にに歴史的な高い価値を見出すからに他ならない。美意識は、芸術と

して進化するとともに、人間の存在そのものの意味をどう深く共有するかにもかかわって練られていくように思われる。

筆者は絵巻物のデータベースシステムも作成済みであるが、その詳細は別稿に譲るとして、本稿では『平治物語絵詞』の現物だけを紹介する。

『平治物語絵詞』は、鎌倉時代の絵師住吉慶恩によって描かれた。そのダイナミックな筆致には定評があり、「三條殿焼討部」は、現在、ボストン美術館の蔵するところとなっている。ここに紹介するのはその模本であるが、それなりの味わいを伝えてくれる。

後白河上皇とその寵臣藤原通憲（後の信西入道）に平清盛が結託したのに対して、藤原信頼が源義朝と組んで反乱を起こしたのが平治の乱である。三條殿焼討部は、その初めにあたる。この焼討ちによって、後白河上皇は信頼・義朝らに幽閉される。

都が戦場となり、身近な死者を多数出した都人は、この絵巻によって、そこに埋め込まれた人の生をドラマとして繰り返し味わったに違いない。

【注】本稿は科学研究費補助金基盤研究（A）（2）「古典籍原本データベースにおけるテキストと絵図の構造的検索の研究」（研究代表者中村康夫。1998～2001年度）の研究成果を取り入れている。また、本稿が利用したフルテキストデータベースは、科学研究費補助金基盤研究（S）「国際コラボレーションによる日本文学研究資料情報の組織化と発信」（研究代表者安永尚志。2001～2005年度）の研究の成果を一部活用している。

中村康夫（なかむらやすお）

大学に入学して源氏物語研究会に入った。専門課程の先輩に囲まれて刺激が一杯あった。図書館で手にする専門書にも驚いた。大学で何を勉強するか、そこで理解した。今＝自分を究明する文学は、歴史的現在を多角的に見る必要がある。物語のテーマが歴史的に深化することも必然的なことと思われた。コンピュータ歴は約30年。古典の本文も、そのベースに敷かれている史料の山も、書齋の電子情報にいつつある。研究の本腰はこれから入るところである。

